

1. テキスト

「表現作用」148頁8行目から151頁11行目まで（「四」）

2. テキスト解釈^{*1}

（第1段落）

「すべて働くものは時に於て働」く（p. 148, ln. 9）。時間とは、あらゆる作用の基底となるのである。では、そもそも時間とは何であるのか。カントは、時間をア・プリオリな認識形式と措定するに留めた。しかし、西田は、意志を背後とする自覚によって、時間が生成するのだとした。ここで、時間とは、ア・プリオリな認識形式に留まるのではなく、「意志の自覚的形式」（p. 148, ln. 12）であると再措定される。

他方、「全く時を離れた思惟の対象界」（p. 148, ln. 13-14）が「思惟によって達することのできない立場」と結合する所に、「無始無終なる時の系列」（以上、p. 148, ln. 10）が現成するとも言っている。

また、時間とは、因果律によって表現される。因果律とは、原因である事象と結果である事象とが、時間において結合する法則のことであり、この法則については、「機械的因果」と「合目的因果」（以上、p. 148, ln. 11）とが、自然への解釈論として対立する。先ず、「機械的因果」とは、機械論的自然観により、自然界の一切の事物の生起について、原因から遡って結果を説明するものである。次に、「合目的因果」とは、目的論的自然観により、かかる事物の生起について、一定の目的によって合目的に規定されることをいう^{*2}。

カントは、自然界を統一的に説明する原理として、「機械的因果」を排し「合目的因果」を採用したが^{*3}、西田は、「機械的因果」及び「合目的因果」ともに「意志の自覚的形式」であるため、双方は根本的に同質であるとした。つまり、双方とも時間によって関連し表現されるものであり、「意志の自覚的形式」である時間において分別せず統一されているのである。ただ、「合目的因果」の方向へと進行する時、「意志は自己自身の根底に還る」（p. 148, ln. 12-13）のである、即ち道德の無限進行と宗教への帰還、あるいは逆対応がなされる。

そして、時間を基底とする「働く世界」（作用）と、時間を超越する「働くことなき世界」（直観）は、どのような関係にあるのか問われていく（以上、p. 148, ln. 14）。

（第2段落）

本段落では、「永遠なる自然の法則」（p. 149, ln. 2）、即ち自然の「一般的法則」（p. 149, ln. 12）について考察がなされる。自然とは、精神の対概念であり、外部／外延的なる実在として法則性を持っている。そして、自然が独立した実在であるとは、自然自体が「働く」ことである。「働く実在」（p. 149, ln. 5）である自然は、ニュートンの絶対時間のように、単に反芻される、どこにでもある時間に抛るのではない。唯一度しか巡り来ることのない、ここにしかない時間に、アインシュタインの固有時のような、即ち「唯一なる時」

(p. 149, ln. 4-5) に拠らなければならない。ニュートンの絶対時間が、カントの物自体と同様に認識を拒絶するならば、「働く実在」として自然を成立させることはできない。自然は「唯一なる時」によって、「働く実在」として独立性を得るのである。

また、自然の「一般的法則」とは、仮言的言説（もしAであるならば、Bである）で示される「一般法則」（p. 149, ln. 6）の並記ではない。それでは、自然を実在として成立させることができない。火薬の爆発に例示されるように、ある事象が生起するという事は、「唯一なる時」によって、全ての世界と関係することである。「移り行く現在の一点に於て時と結合して居なければならぬ、即ち全体と結合して居なければならぬ。」（p. 149, ln. 11-12）とは、このことを言うのであろう。

そして、『善の研究』第一編第二章「思惟」において、「具体的思惟より見れば、概念の一般性というのは普通にいうように類似の性質を抽象した者ではない、具体的事実の統一力である、ヘーゲルも一般とは具体的なる者の魂であるといっている（Hegel, *Wissenschaft der Logik*, III, S. 37）。」（ZK p. 37, ln. 7）と記述されるように、ヘーゲルの〈概念（Begriff）〉と同様、「一般的法則」とは、具体的全体から抽象されたものではなく、「唯特殊の座標に対して所謂不変群を成すものである」（p. 149, ln. 13）とされる。

ここで、「不変群」とは、アインシュタインの特殊相対性理論におけるローレンツ変換に関わる定義に拠った概念であると思われ、西田の術語であると考えられる。

ローレンツ変換とは、光速度不変原理及び相対性原理を前提とした、慣性の法則が成立する二つの座標系（二つの慣性系） K 、 K' 間における、時空に関する座標変換のことである。座標系 K に対して座標系 K' が相対速度 v で等速直線運動をするとき、各座標系 K 、 K' における物理法則（例えば、電磁気学のマクスウェル方程式など）は、ローレンツ変換によって、同一の形式が保持される。そして、ローレンツ変換に対して不変性を保つことを、ローレンツ不変性といい、ローレンツ変換の全体が成す群のことを、ローレンツ群という。

以上より、「一般的法則」とは「唯特殊の座標に対して所謂不変群を成すものである」との措定は、一般と特殊に係る対概念の関係性を定めたものとして、以下のように解釈できるかと考える。

第一に、「特殊の座標」を各座標系 K 、 K' と符合させるならば、「特殊の座標」とは、個別の状態にある各体系（特殊／個物／特異性）のことをいい、第二に、「不変群」をローレンツ変換（ローレンツ群）と符合させるならば、「不変群」とは、個別の状態にある各体系間において、ある事象が各別に生じているにもかかわらず、その事象は同一の形式を保持する、即ち不変性を表現することを示す体系（一般／一般者／普遍性）のことをいっていると思われる。よって、「不変群」とは、純なる形相による同一形式の保持、即ち不動の動者による不変性の表現が現前すると見做されるとき、即ち神と見立てることも可能なのかもしれない。

そして、「一般的法則の底には何時でも全体の統一が予想せられて居なければならない。」（p. 149, ln. 13-14）ことについて、例えば、ローレンツ変換において、その特殊としてガリレイ変換が包括されるという物理法則の統一的説明^{*4}を心象として、「一般的法則の底」における「全体の統一」と言い表しているのかもしれない。

自然の法則は、精神あるいは有機体のような自然現象以上の具体的実在の立場からは、抽象的事象であると見做されるが、そうではなく一般的事象なのであり、即ち「一般的法

則」だということができる (p. 149, ln. 14-15)。

(第3段落)

前段落に対して本段落では、「思惟作用の世界」(p. 150, ln. 2)、あるいは「意志の対象界」(p. 150, ln. 9)における法則、即ち精神の「一般的法則」について考察がなされる。精神は、内部／内包的なる実在として法則性を持っており、ここにおいて、自然の「一般的法則」と比較される。

最初に、「思惟作用の世界」においては、「一般妥当的な思惟の内容」(p. 150, ln. 2)が「不変群」となるとしている。加えて、精神が関わる時間として、「人格時」(p. 150, ln. 3)が定義される。カントのいう人格とは、「みずからの理性の命じる道徳法則に従って、自律的に行為する自由な道徳的主体をさす。」^{*5}とされるが、「人格時」の人格とは、これを踏まえたものだろう。また、西田によるならば、時間は、意志を背後とする自覚によって成立すると措定される。ならば、「人格時」は、「意志が意志自身の自覚に還る時」(p. 150, ln. 6)に「内容ある時」(p. 150, ln. 6)として、「意志的統一の世界」(p. 150, ln. 6-7)を成立させる。「人格時」において、「思惟の内容」(p. 150, ln. 3)は、全体として相互に作用し関係するのである。さらに、以上を踏まえるならば、自然の世界は、「無内容なる時」(p. 150, ln. 7)から「内容ある時」へと移ることにより、「思惟作用の世界」として成立する。

次に、「意志の対象界」における「不変群」について考察が進みゆく。ここで、かかる考察にあたり、カントの「目的の王国」(p. 150, ln. 10)が示される。カントのいう「目的の王国」とは、「汝の人格や他のあらゆる人の人格のうちにある人間性を、いつも同時に目的として扱い、決して単に手段としてのみ扱わないように行為せよ」^{*6}(『実践理性批判』, 1788年)という定言命法を旨とした人格の共同体のことである。西田は、「目的の王国」を「意志の対象界」として捉え、この王国は、特殊化の方向に進んで行くのだとした。おそらく、このカントの人格主義と関係しているのだろう。人格の尊重は、各人各別に対して実践されるものであり、結果として、各人各別の構成による人格の共同体が形成されていく。この事態をもって、特殊化の方向に進行すると言っているのだと思われる。

そして、特殊化の方向に存置する「人格的座標」(p. 150, ln. 12)に対して「不変群」を成すものは、「一般妥当的な思惟の内容」であるとし、それは「当為の法則」(p. 150, ln. 13)でなければならないとしている。当為(Sollen)とは、書き下すならば、まさニ〜なすベシとなり、存在(Sein)又は必然(Müssen)を対概念として、あるべきこと・なすべきことを意としている。カントの〈わが内なる道徳法則〉^{*7}と通底し、『善の研究』第一編第四章「知的直観」で示される「真の宗教的覚悟」(ZK p. 52, ln. 1)とも言うことができ、よって精神的生活を構成する力となるものである。

「当為の法則」は、「人格時の現在」(p. 150, ln. 14)である「我々の内部知覚」(p. 150, ln. 14)、あるいは純粹経験において、常時、潜在的に働いている。この法則は、自然に関わる「物理時の現在」(p. 150, ln. 15)が全体と関係して働いているのと同様、外的な攪乱のない普遍的な「一般的法則」のように、「人格時」において、「無限なる思惟内容」(p. 151, ln. 2)が働き、全体が「無限なる関係」(p. 151, ln. 2-3)を持つときにおいて、「一般妥当的なもの」(p. 151, ln. 3)となる。そして、「思惟内容の世界」(p. 151, ln. 4)

において、「内部知覚の明証」(p. 151, ln. 3), 明白 (Evidenz) とは, 自然に対する物理的実験の検証と同等であるといえることができる。

『善の研究』第四編第三章「神」において、「宇宙は神の所作物ではなく, 神の表現 manifestation である。」(ZK p. 236, ln. 3-4) と記述されている。つまり, 宇宙は神の創造ではなく顕現であり, 我々が宇宙であるとするならば, 「我々の思惟の作用は斯くの如き神の思惟の発現」(p. 151, ln. 6-7) であり, 「すべての思惟は神に於て現在」(p. 151, ln. 6) となる。すなわち, 宇宙において, 全ての物理的な力が同時に働いているように, 「神の思惟」(p. 151, ln. 4) において, 全ての思惟内容は働いている。

「唯一なる時」, 「繰り返すことのできない時」(p. 151, ln. 7) となった「人格時」は, 「無限に達することのできない高次の立場」(p. 151, ln. 7-8) である神へと結合する。そうすることで, 超個人的である神となった「人格時」において, 全ての思惟内容が働くのである。

「一般的法則」などの「永久真理」(p. 151, ln. 10) は, 「物理時」において成立することができない, ただ「人格時」においてのみ成立することができるのである。

3. 哲学的問い

「美しい書物はどれも一種の外国語で書かれている」*とは, フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) が好んで使った言葉である**。この言葉を踏まえる時, 哲学書におけるテキスト解釈とは, どのようになされるべきであろうか。

* マルセル・プルースト『サント=ブーヴに反論する』(Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*)

** ジル・ドゥルーズ『批評と臨床』(Gilles Deleuze, *Critique et clinique*) など。

*1 引用文は, 旧字体を新字体に改記し, 初出につき頁行数を以下のとおり表記する。

・西田幾多郎 (1950) 『西田幾多郎全集』第4巻「働くものから見るものへ」, 株式会社岩波書店
: 「〈引用文〉」(p. 〈頁数〉 - 〈頁数〉, ln. 〈行数〉 - 〈行数〉) など。

・西田幾多郎 (1950) 『善の研究』(岩波文庫), 株式会社岩波書店
: 「〈引用文〉」(ZK p. 〈頁数〉 - 〈頁数〉, ln. 〈行数〉 - 〈行数〉) など。

*2 濱井修監修 (2009) 『倫理用語集改訂版』, 株式会社山川出版社, p. 212; [目的論的自然観]

*3 同書, p. 212; 同上

*4 アインシュタインの特殊相対性理論におけるローレンツ変換と, ニュートン力学におけるガリレイ変換との関係は, 例えば, ローレンツ変換 $x' = x - vt / \{ 1 - (v/c)^2 \}^{1/2}$ (x' : 座標系 K' の x' 座標, x : 座標系 K の x 座標, v : 相対速度, t : 座標時, c : 真空中の光速) において, $v/c \rightarrow 0$ のとき, ガリレイ変換 $x' = x - vt$ として示される。すなわち, ローレンツ変換において相対速度 v の適用範囲を, 例えば, 電車の走行など日常の世界に限定するとき, ガリレイ変換となるのである。これをもって, ローレンツ変換において, その特殊としてガリレイ変換が包括されるという物理法則の統一的説明, と表現した。

*5 前掲書 (*2), p. 212; [人格〈カント〉]

*6 同書, p. 212

*7 「わが上なる星の輝く空と, わが内なる道徳法則」とは, 『実践理性批判』(1788年) の結語である。